

パートII. 旧約時代

11章 士師記の時代から王制へ

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

(1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

(2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートI. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

(1) 神は、人類を臣民とする神の国を造ろうとされた。

(2) サタンは、悪魔の国を作り、自らが王になろうとした。

(3) 神は、創世記3章15節で対抗策を啓示された (原福音)。

3. パートII. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

(1) サタンはなぜ王制を好んだのか。

(2) 神はどのような対抗策を採られたのか。

4. アウトライン

(1) 民の霊的状态

(2) サムエルの登場

(3) 王を求める声

(4) サウルの登場

士師記の時代から王制への移行について学ぶ。

I. 民の霊的状态

1. 士師記の時代は、背教と混乱の時代であった。

(1) この状況に終止符を打つために、神はサムエルという器を用意された。

(2) 士師記の時代は、預言者の時代に向かう移行期であった。

- ①モーセ・ヨシュアの時代は終わった。
- ②まだ預言者の時代が到来していなかった。
- ③1サム3:1b

1Sa 3:1b そのころ、【主】のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった。

2. イスラエルの民の信仰は、風前の灯のように消えかかっていた。

(1) 大祭司エリの目は、かすんできて、見えなくなっていた (1サム3:2b)。

- ①肉体の目とともに、霊的な目もかすんでいたことを表わしている。
- ②彼は、息子たちの暴走をくい止めることができなくなっていた。

(2) 指導者がいない民は、滅びるしかない。

- ①この状況の中に神が介入された。
- ②サムエルは、イスラエルに霊的覚醒をもたらす神の器である。

II. サムエルの登場

1. サムエルは、祭司と預言者という二重の召命を受けた。

(1) 不妊の女であったハンナは、【主】に祈って息子を得た。

- ①彼女は、その息子をサムエルと名づけた (【主】は聞かれる)。
- ②彼女は、サムエルを【主】の働きのために献げた。

(2) 少年サムエルは、【主】からの語りかけを受けた (1サム3:1~14)。

- ①彼は、大祭司エリの子の没落をそのまま預言した。
- ②これが、サムエルの奉仕の始まりであった。
- ③預言者は、神のことばをそのまま民に伝える。

2. 大祭司エリが死に、サムエルが霊的指導者となった。

(1) ペリシテ人との戦いで、神の箱が奪われた。

- ①その知らせ受け、エリは首を折って死んだ (享年98歳)。
- ②神の箱が奪われたことで、イスラエルは国家存亡の危機に直面した。
- ③その後、契約の箱はペリシテの地からイスラエルの地に返還された。
- ④回り回って、キルヤテ・エアリムに20年間とどまることになる。

(2) 成人したサムエルは、ミツパの集会において、イスラエルをさばいた。

- ①イスラエルの全家に向かって、偶像礼拝を悔い改めるように激しく迫った。
- ②民は直ちに、バアルやアシュタロテを除き去った。

③その結果、建国以来最大のリバイバル（宗教改革運動）が起こった。

(3) このリバイバルは、イスラエルに4つの祝福をもたらした。

①40年にわたるペリシテ人の支配が終わった。

②失っていた領土を取り返した。エクロンからガテに至る地域。

③ペリシテ人との戦いが止んだ。再開されるのは、サウルの時代に入ってから。

④アモリ人の間に平和が訪れた（東の国境地帯も平和になった）。

3. サムエルは、生涯現役を貫いた。

(1) 1サム7:15

1Sa 7:15 サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。

1Sa 7:16 彼は年ごとに、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し、これらすべての聖所でイスラエルをさばき、

1Sa 7:17 ラマに帰った。そこに自分の家があり、そこでイスラエルをさばいていたからである。彼はそこに【主】のために祭壇を築いた。

①ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し士師としての務めを果たした。

②人々が難問題の解決を求めてやって来たとき、それに回答を与えた。

③これら3つの町に、「預言者のための学校（塾）」を設立した。

④巡回奉仕が終わると、ラマの家に帰り、そこでも士師としての任務を果たした。

(2) 70歳になった頃、2人の息子を士師に任命し、ベエル・シェバに派遣した。

①南部地方は息子たちに任せ、自分は北部地方だけをさばくことにした。

②しかし、それは失敗に終わった。

③息子たちは、父サムエルとは異なり、賄賂を取って裁きを曲げたのである。

④サムエルもまた大祭司エリと同じように、息子の養育に失敗した。

⑤ここに、サタンの妨害を見ることができる。

III. 王を求める声

1. 12部族の長老たちが、王を与えて欲しいと要求した。

(1) 民のこの要求は、悪魔の誘いによるものである。

2. 悪魔は、それまでの経験を通して教訓を学んだ。

(1) 士師たちの時代が続く限り、背教は地域的なものにとどまる。

①このままでは、全イスラエルを墮落させるのは不可能である。

(2) 王政に移行すれば、王の墮落が全イスラエルの墮落につながる。

- ①当時、イスラエルの政治形態は神政政治であった。
- ②神が王で、神は預言者や士師を通して民に語りかけていた。
- ③しかし民は、それよりも人間の王に信頼を置く政治形態を求めた。

3. サムエルは、神の御心を求めた。

- (1) サムエルは、不愉快になったが、【主】に祈ると、次のような答えがあった。
 - ①民の言う通りにせよ。
 - ②彼らは、サムエルを退けたというよりは、神ご自身を退けたのである。
 - ③これは新しいことではなく、民の歴史上いつも起こってきたことである。
 - ④民を治める王の権利を民に知らせよ。

4. サムエルは、王政には犠牲が伴うことを民に説明した。

- (1) サムエルの警告
 - ①王は、息子たちを徴兵し、戦士として使役するようになる。
 - ②王は、娘たちを取り、王宮で仕えさせるようになる。
 - ③王は、新たに税を徴収し、民は重税で苦しむようになる。
 - ④王は、奴隷や家畜の中から最上のものを取り、仕事をさせるようになる。
 - ⑤それまで民が持っていた自由は、かなりの程度制限されるようになる。
- (2) 民は、その警告に耳を傾けず、他国民のようになりたいと王を求めた。
 - ①ここでの民の罪とは、神を退け、人間の王に頼ろうとしたことにある。
 - ②もう一つの罪は、神の時を無視して王を求めたことである。

IV. サウルの登場

1. 神は、イスラエルに王が必要になることを予知し、人材を用意しておられた。

- (1) それがダビデである。
 - ①ダビデは若過ぎたので、サウルが王に選ばれることになった。
 - ②神の時を待てない者は、必ず墓穴を掘るようになる。

2. イスラエルは、サウルを王とする王政（統一政府体制）に移行した。

- (1) 悪魔にとっては、一挙に契約の民を墮落させる好機が到来したことになる。
 - ①これ以降悪魔は、サウルを標的として激しく攻めた。

3. 即位して2年後、サウルは【主】に背き、誤った判断を下した。

- (1) 祭司にしか許されていないいけにえを、自らの手で献げた。
 - ①サムエルからその罪を糾弾されると、自分を正当化する理屈を並べ立てた。

②神は、聖霊をサウルから取り去り、ダビデにお与えになった。

(2) それ以降サウルは、より激しい悪魔の攻撃にさらされることになる。

①1サム 16:14

1Sa 16:14 さて、【主】の霊はサウルを離れ去り、【主】からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。

(3) サウルの性格は、異常なものに変質していった。

①常軌を逸した自己愛

②異常なほどの嫉妬心

③全的墮落

4. 神は、ペリシテ人との戦いを用いて、この状況に介入された。

(1) サウルは、ギルボア山でのペリシテ人との戦いで戦死した。

①3人の息子（ヨナタン、アビナダブ、マルキ・シュア）も戦死した。

②ペリシテ人たちは、特にサウルとその息子たちを狙い撃ちにした。

(2) サウルが戦死したのを見て、イスラエル人たちは、町々を捨てて逃走した。

①その後にペリシテ人がやって来て、そこに住むようになった。

②イスラエルの人々が築いてきた町々が、敵の手に渡ったのである。

(3) まとめ

①王としてのサウルは、最初は素晴らしいスタートを切った。

②小さな不従順の積み重ねにより、【主】に反抗することが習慣になった。

③その背後にサタンの策略があった。

④神は、サウルと息子たちを戦死させることで、悪魔の策略を阻止された。

⑤次に神が立てる器は、ダビデである。

パートII. 旧約時代
12章 ダビデ

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートI. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

3. パートII. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

- (1) サタンはなぜ王制を好んだのか。
 - ①王の墮落が全イスラエルの墮落につながる。
- (2) 神はどのような対抗策を採られたのか。
 - ①サウルと息子たちを戦死させた

12章 ダビデ

4. アウトライン

- (1) 王国の確立
- (2) ダビデ契約
- (3) 悪魔の攻撃
- (4) 更なる悪魔の攻撃

ダビデに対する悪魔の攻撃について学ぶ。

I. 王国の確立

1. サウルに代わってダビデが王として立てられた。
 - (1) 神の国と悪魔の国の葛藤において、ダビデは重要な役割を果たすことになる。
 - ①悪魔は、ダビデを標的に激しい攻撃を仕掛けてくる。

(2) ダビデは、短時間の内に統一王国を確立した。

- ①サウルが戦死した後、12部族を統合した統一王国の王となった。
- ②エブス人の町であったエルサレムを征服し、そこを統一王国の首都とした。
- ③エルサレムは、政治的にも宗教的にも、イスラエルの中心地となった。
- ④仇敵ペリシテ人の脅威を完全に取り去った。

2. ダビデは、エルサレムで「神の家」を建設することを志した。

(1) しかし神は、ダビデが神殿を建設することをお許しにならなかった。

- ①ダビデが多くの人々の血を流した戦士だったからである。
- ②神殿建設は、息子ソロモンに委ねられることになる。

3. この時点で神は、預言者ナタンを通して、ダビデと契約を結ぶと宣言された。

(1) その契約が、「ダビデ契約」と呼ばれるものである。

II. ダビデ契約

1. ダビデ契約の内容 (2サム7:4~17)

(1) 2サム7:12~16

2Sa 7:12 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。

2Sa 7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をどこしえまでも堅く立てる。

2Sa 7:14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。

2Sa 7:15 しかしわたしの恵みは、わたしが、あなたの前から取り除いたサウルからそれを取り去ったように、彼から取り去られることはない。

2Sa 7:16 あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。』

(2) 契約条項

①ダビデは、【主】のために家（神殿）を建てようと企てたが、逆に【主】が、ダビデのために一つの家（王朝）を造られる。

*つまり、ダビデ王朝が誕生し、いつまでも継続するということである。

②ダビデの身から出る世継ぎの子が、ダビデの死後、王国を確立する。

*世継ぎの子とは、ソロモンのことである。

③そのソロモンが、【主】のために神殿を建てるようになる。

- ④その王国の王座は、永遠に続く。
- ⑤しかし、もしソロモンが罪を犯すなら、【主】は彼を懲らしめる。
- ⑥サウルのときのようにソロモンから恵みが取り去られることはない。

*これは、契約に基づく神の愛、無条件の愛である。

- (3) 永遠に続く3つのことがらが約束された。

- ①ダビデの家（王朝）
- ②ダビデの王国
- ③ダビデの王座

2. ダビデ契約は、悪魔に向けられた神の宣言である。

- (1) 「イスラエルは永遠に滅びることはない」という神の宣言である。
 - ①ダビデの子孫は、歴史の終わりまで途絶えることなく続く。
 - ②終わりの時代に御国（千年王国）が確立される時、ダビデの子孫である人物がダビデの王座に着いて統治するようになる。

- (2) 後の時代に登場する預言者たちは、救い主はダビデの家系から誕生し、ダビデ契約の内容は「ダビデの子」において成就すると預言するようになる。

- ①ダビデ契約は、神の国と悪魔の国の葛藤において、決定的な意味を持つ。

3. 神の宣言を聞いた悪魔は、当然次の手を考えた。

- (1) 神の計画を阻止する方法は、ダビデの家系を破壊することである。
 - ①これ以降、悪魔の計画はそのことを軸に進んで行く。

III. 悪魔の攻撃

1. 神はダビデを大いに祝福された。

- (1) ダビデは、イスラエルの黄金時代を築くことができた。
 - ①ダビデの指揮下にあつて、イスラエルは勝利に次ぐ勝利を経験した。

2. すべてが順調に進んでいると思われた時に、悪魔が攻撃を仕掛けて来た。

- (1) ダビデの家系を破壊することが、悪魔の最終ゴールである。
 - ①そのためには、ダビデを攻撃するところから始めるのが一番である。
 - ②悪魔はダビデの弱点を突いた。
 - ③悪魔の誘惑に乗ったダビデは、姦淫と殺人の罪を犯した。
 - *2サム11章に出て来るバテ・シェバ事件
 - ④その結果、ダビデの霊的、肉体的状態は、破滅寸前まで追い込まれた。

3. 彼は、【主】の前で心を注ぎ出して悔い改めの祈りを捧げ、赦しを乞うた。

(1) 詩篇 51 篇は、後世に残る悔い改めの詩である。

①神は、ダビデの罪を赦された。

(2) 罪は赦されても、罪の結果は残る。

①神は、ダビデと民に教訓を学ばせるために、多くの苦難をもたらされた。

②姦淫の結果誕生した子は、【主】に打たれて病気になり、死んだ。

(3) ダビデの絶頂期は、2サム 12 章をもって終わる。

①13 章以降、ダビデの生涯は、坂道を転がり落ちるように下降して行く。

②次にダビデを襲うのが、家庭内での近親相姦と兄弟殺しの悲劇である。

③息子のアブシャロムが、長子アムノンを殺害する。

④アブシャロムは、父ダビデに対して謀反を起こし、王位を奪おうとする。

⑤その結果、ダビデは都落ちに追い込まれる。

*敵は、「彼に神の救いはない」と罵倒する。

⑥これらいっさいが、罪を矯正するための神からの訓練であった。

IV. 更なる悪魔の攻撃

1. 悪魔の攻撃は、今度は人口調査という形を取ってやってきた。

(1) ダビデが人口調査（兵力の調査）を行った動機は、力を誇るためであった。

①彼は、神よりも自らの力に頼ろうとしたのである。

(2) 人口調査をする場合は、贖い金を納める必要があった（出 30 : 12）。

①ダビデは、その律法に不従順であった。

②神は、傲慢の罪のゆえに、ダビデとイスラエルの民を裁かれた。

③これもまた、彼らの過ちを矯正するための裁きである。

(3) ダビデは、ただちに悔い改めの祈りを神に献げた。

①神は、先見者ガドを通して 3 つの罰を示し、その中からひとつを選択するようにダビデに伝えた。

②1 歴 21 : 12

1Ch 21:12 三年間の飢饉か。三か月間、あなたが敵の前で攻めたてられ、敵の剣があなたに追い迫ることか。三日間、【主】の剣、疫病がこの地に及び、【主】の使いがイスラエルの国中を荒らすことか。』今、私を遣わされた方に何と答えたらよいかを決めなさい。」

③ダビデは、3 番目の罰を選んだ。

*人の手に陥るよりは、【主】の御手に陥る方がよいと判断した。

2. 神は、悪魔の策略を粉碎された。

(1) 【主】は疫病を下されたので、7万人が倒れた（1歴21:14）。

①ここでの神の裁きは厳しすぎると感じる方がいるに違いない。

(2) 人口調査を行った罪は、「高慢（プライド）の罪」である。

①それは、サタンの墮落の原因となった罪である。

②ダビデは、自分が所有する兵力を誇ったのである。

③神は、彼の高慢を砕くために、原因となっているものを取り去られた。

(3) 【主】は、力の源はご自身であることを、ダビデとイスラエルの民に教えた。

①またしても、悪魔の策略は失敗に終わった。

パートII. 旧約時代

13章 ソロモン

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

(1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

(2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートI. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

3. パートII. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

12章 ダビデ

*ダビデ契約は、悪魔に対する神からの宣言であった。

*悪魔は、ダビデを誘惑した。

*姦淫と殺人の罪。人口調査の罪。

13章 ソロモン

4. アウトライン

(1) 王国の黄金時代

(2) ソロモンの罪

(3) 王国の分裂

ソロモンに対する悪魔の攻撃について学ぶ。

I. 王国の黄金時代

1. イスラエルは、ソロモンの治世下において黄金期を迎えた。

(1) その治世の始まりに、ソロモンは、自分の祝福ではなく知恵を求めた。

①神はそれを喜ばれ、知恵だけでなく、富と誉れも与えると約束された。

②統一王国が黄金期を迎えた理由は、神がソロモンに与えた「知恵」にある。

2. ソロモンが達成した偉業のひとつが、神殿の建設である。

(1) 神殿が完成し、契約の箱が至聖所に納められた時、神殿に雲が満ちた。

①この雲は、【主】の臨在を表すシャカイナグローリーである。

②神はソロモンの神殿を受け入れ、そこに臨在することをよしとされた。

③2歴5:13~14

2Ch 5:13 ラッパを吹き鳴らす者たち、歌い手たちが、まるで一人のように一致して歌声を響かせ、【主】を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルと様々な楽器を奏でて声をあげ、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで」と【主】に向かって賛美した。そのとき、雲がその宮、すなわち【主】の宮に満ちた。

2Ch 5:14 祭司たちは、その雲のために、立って仕えることができなかった。【主】の栄光が神の宮に満ちたからである。

④モーセが幕屋を完成させた時も、同じ現象が起こっていた(出40:34~35)。

(2) 神は、神殿奉獻の祈りへの答えとして、ソロモンを祝福すると約束された。

①ダビデのように忠実に歩むなら、ダビデに約束されたことが成就する。

②その約束とは、ダビデ王朝の継続である。

(3) と同時に、警告のことばも語られた。

①もしソロモンとイスラエルの民が偶像礼拝に走るなら、神の裁きが下る。

②裁きには2つのものがある。

*イスラエルの民はカナンの地を追われ、捕囚に引かれて行く。

*神殿は神から見捨てられ、民は諸国民の物笑いとなる(1列9:1~9)。

II. ソロモンの罪

1. 悪魔は、王となったソロモンを集中的に攻撃した。

(1) 悪魔の狙いは、民が墮落することと、ダビデの家系が途絶えることである。

①「王が墮落すれば、民も墮落する」というのが、悪魔の基本戦略である。

②悪魔の誘惑に乗ったソロモンは、数々の重罪を犯すようになる。

2. 軍事力の増強

(1) 1列10:26

1Ki 10:26 ソロモンは戦車と騎兵を集め、戦車千四百台と騎兵一万二千人を所有した。彼はこれらを戦車の町々、およびエルサレムの王のもとに配置した。

①当時、戦車は最強の武器であった。

②ソロモンは、戦車を1,400台、騎兵を12,000人確保した。

- ③「戦車の町々」とは、北からハツォル、メギド、ゲゼルのことである。
- ④しかし、戦車を大量に保持することは、律法違反であった。

(2) 申 17 : 16

Deu 17:16 ただし王は、決して自分のために馬を増やしてはならない。馬を増やすために民をエジプトに戻らせてはならない。【主】は「二度とこの道に戻ってはならない」とあなたがたに言われた。

- ①富を蓄えたり、戦車を増やしたりするのは、御心に反することである。
- ②目に見えるものに信頼を置き、神を無視するようになるからである。
- ③神以外のものに信頼を置くなら、信仰の危機が訪れる。

3. 外国の女たちとの結婚

(1) 1列 11 : 1~3

1Ki 11:1 ソロモン王は、ファラオの娘のほかに多くの異国人の女、すなわちモアブ人の女、アンモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヒッタイト人の女を愛した。

1Ki 11:2 この女たちは、【主】がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中に入ってはならない。彼らをあなたがたの中に入れてもいけない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる」と言われた、その国々の者であった。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかった。

1Ki 11:3 彼には、七百人の王妃としての妻と、三百人の側女がいた。その妻たちが彼の心を転じた。

- ①申 17 : 17 は、多くの妻を持つことを禁じている。
- ②ソロモンのハーレムには、妻が 700 人、そばめが 300 人囲われていた。
- ③その女たちが、ソロモンの心を【主】から偶像神に向けさせた。

(2) 晩年のソロモンは、父ダビデの心からはかけ離れて行った。

- ①とは言え、【主】への信仰を捨てたわけではなかった。
- ②【主】以外に、妻たちがもたらした偶像神をも礼拝するようになった。

(3) ソロモンが礼拝した偶像神とは、次のようなものである。

- ①アシュタロテ（シドン人の豊穡と性の女神。礼拝は淫乱なものであった）
- ②ミルコム（アンモン人の神。子どもをいけにえとすることで悪名高い）
 - *レビ 18 : 21 は、名指しでミルコムを警戒するように命じている。
- ③モアブ人の偶像神ケモシュとアモン人の偶像神モレク（ミルコムの別名）
 - *ケモシュとモレクのために、オリーブ山の上に高き所（祭壇）を築いた。

4. ソロモンの失敗の原因

- (1) 自分もまた他国の王たちと同じように振る舞おうとした点にある。
 - ①ソロモンの偉大さは、【主】から与えられたものであった。
 - ②【主】から離れ、自らの使命を忘れたとき、ソロモンは背教の王になった。
 - ③その結果、神殿が存在していることが希薄となった。
 - ④さらに、霊的混乱が民の間に広がった。
 - ⑤この状況を一番喜んだのが悪魔であることは、言うまでもない。

III. 王国の分裂

1. ソロモンの死後、統一王国は南北に分裂する。

- (1) これは、ソロモンの罪に対する裁きであるが、それだけではない。
 - ①神は、偶像礼拝の震源地であるユダから北の10部族を切り離された。
 - ②また、ダビデの家系の人たちに、偶像礼拝の愚かさを教えようとされた。
- (2) この目的のために用いられたのが、ヤロブアムである。
 - ①アヒヤは、外套を12切れに引き裂き、10切れを取れとヤロブアムに命じた。
 - ②ヤロブアムが北の10部族の王となるということの絵画的表現である。
- (3) 王国が完全に滅びない理由は、ダビデ契約にある。
 - ①1列11:32

1Ki 11:32 ただし、ソロモンには一つの部族だけ残る。それは、わたしのしもべダビデと、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだ都、エルサレムに免じてのことである。

- ②「一つの部族だけが」というのは、ユダ族のことである。
- ③ベニヤミン族は弱小部族。ユダ族と合わせて一つの部族と見なされた。
- ③王国は、ダビデ契約のゆえに、小規模になっても生存し続ける。
- ④そこから、約束のメシアが誕生する。

2. ヤロブアムの台頭

- (1) ある時点で、ソロモンはヤロブアムを殺そうとした。
 - ①ソロモンの殺意の背後に、悪魔の策略が見え隠れする。
 - ②ヤロブアムが死ねば、ソロモンから10部族を取り去る計画は挫折する。
- (2) ヤロブアムはエジプトに亡命し、ソロモンが死ぬまでそこに滞在した。
 - ①当時のエジプトの王は、シシャクであった（後にユダに侵入する）。
 - ②エジプト滞在は、ヤロブアムに悪影響をもたらした。
 - ③この時期に彼は、「金の子牛」を神とするアイデアを思いついたのであろう。

- (3) ソロモンが死ぬと、その子レハブアムが王となった。
- ①戴冠式の最中に、北の10部族が新王に対して直訴に及んだ。
 - ②そのスポークスマンになったのが、ヤロブアムである。
 - ③彼はエジプトにいたが、エフライム族の代表たちによって呼び戻された。
 - ④ヤロブアムは、2つのことを要請した。
 - *重税を軽減してほしい。
 - *強制労働を軽くしてほしい。
 - ⑤ソロモンの時代、王国の維持のために、民は過剰な負担を強いられていた。
 - ⑥この要請は、北の10部族の総意であり、当然のことであった。
- (4) レハブアムは、愚かな王であった。
- ①ヤロブアムの要請を受け入れるようにという長老たちの助言を退けた。
 - ②自分に仕えている若者たちの意見を尊重した。
 - ③若者たちは、ソロモン時代以上に厳しく統治すべきであると助言した。
 - ④彼は、知恵ある助言よりも、自分が聞きたいと思っている助言に耳を傾けた。
 - ⑤かくして、ソロモンの統一王国は、イスラエルとユダに分裂した。
 - ⑥南北分裂は、偶然の出来事ではない。
 - ⑦悪魔の策略に対抗するために、【主】が導かれたことであった。
- (5) **イスラエルの歴史は、北王国の崩壊、南王国の崩壊へと進んでいく。**

パートⅡ. 旧約時代

14章 北王国の崩壊

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

(1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

(2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

12章 ダビデ

*ダビデ契約は、悪魔に対する神からの宣言であった。

13章 ソロモン

14章 北王国の崩壊

4. アウトライン

(1) ヤロブアムの罪

(2) 最悪の王アハブ

(3) 悪魔の使いイゼベル

(4) アッシリア捕囚

北王国の崩壊について学ぶ。

I. ヤロブアムの罪

1. ソロモンの後継者レハブアムは、愚かな決断によって王国の分裂をもたらした。

(1) 統一王国は、イスラエル (北王国) とユダ (南王国) に分裂した。

(2) この時から南北朝時代に突入する。

2. 神はヤロブアムに、北王国の確立を約束しておられた（1列11:31、37～38参照）。

(1) ダビデのように【主】の命令を守るなら、彼の王国は祝されるはずであった。

- ①しかし彼は、不信仰に堕ちて行った。
- ②神に背を向けたとたん、彼の心は恐れで満たされた。
- ③神を信頼しない者は、恐れに支配されるようになる。
- ④サタンはその恐れを利用した。

3. ヤロブアムが考えた国防策

(1) 民がエルサレムに上らないような仕組みを造った。

- ①エルサレムへの巡礼を許可したなら、民の心はユダになびくようになる。
- ②ダン（北の国境の町）とベテル（南の国境の町）に金の子牛の像を置いた。
- ③1列12:28～29

1Ki 12:28 そこで王は相談して金の子牛を二つ造り、彼らに言った。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」

1Ki 12:29 それから彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。

- ④これは、ヤハウエ礼拝に別の要素を付加したものである。
- ⑤ここには、エジプトの影響が見受けられる。
- ⑥ヤロブアムにはエジプト亡命の経験があった（1列11:40）。

(2) また彼は、祭司を新しく任命した。

- ①その結果、レビ族でない部族の者が、祭司職に就くようになった。

(3) さらに、例祭の規定を変更した。

- ①仮庵の祭りをひと月遅れで祝うようにした。
- ②かくして、北の10部族と南の2部族は、宗教的にも対立するようになった。

4. ユダとイスラエルの信仰形態の比較

(1) ユダの信仰の特徴

- ①神をかたどった像はない。
- ②レビ系祭司のみ認められる。
- ③神殿はエルサレムにのみある。
- ④唯一神信仰が保持される。

(2) イスラエルの信仰の特徴

- ①金の子牛を崇拝する。

- ②レビ族以外の者も祭司となる。
- ③神殿はダンとベテルにある。
- ④混合宗教の要素が強くなる。

II. 最悪の王アハブ

1. イスラエルの偶像礼拝は、ユダよりも激しいものであった。

(1) イスラエルでは、約210年の間に、9王朝が興亡を繰り返す。

- ①その9王朝から19人の王が出現するが、善王はひとりも出て来ない。
- ②その中で、最悪の王はアハブである。
- ③彼はシドンの王女イゼベルと結婚し、バアル礼拝を国内にもたらした。
- ④悪魔は、神の民の半分（イスラエル）を破壊しようとしたのである。

(2) アハブは、父オムリが建設したサマリアを首都として、22年間統治した。

- ①父オムリは、それまでに登場した王の中では最悪であった。
- ②息子のアハブは、それよりもさらに邪悪な王であった。
- ③1列16:29~31

1Ki 16:29 オムリの子アハブは、ユダの王アサの第三十八年に、イスラエルの王となった。オムリの子アハブはサマリアで二十二年間、イスラエルの王であった。

1Ki 16:30 オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも【主】の目に悪であることを行つた。

1Ki 16:31 彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであつた。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻とし、行ってバアルに仕え、それを拝んだ。

- ④彼の罪は、偶像礼拝を国中に広げたことである。
- ⑤しかし彼は、それ重大な罪だとは思わず、「軽いこと」と考えていた。
- ⑥彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻に迎えた。
- ⑦これは、強制された結婚ではなく、自発的なものであつた。
- ⑧それゆえ、この結婚の責任は、アハブにある。

2. イゼベルとともに、バアル礼拝がイスラエルに侵入してきた。

(1) バアル（主という意味）礼拝の内容

- ①バアルとは、イスラエルの地で礼拝されていた男神の総称である。
- ②礼拝形態にはさまざまなものがあつた。
- ③シドン人（フェニキア人）のバアル礼拝も、その変種の一つである。

(2) 神の対抗策は、預言者エリヤとエリシャの派遣である。

- ①彼らの時代は、出エジプト時代に続いて奇蹟が起こつた時代となる。

- ②彼らのメッセージは、悔い改めと申命記の律法への立ち返りである。
- ③この時期、「イスラエルの残れる者」という概念が誕生した(1列19:18)。

III. 悪魔の使いイゼベル

1. 権力欲に満ちた妻が、意志薄弱な夫を支配するという関係ができた。
 - (1) 北王国にバアル礼拝が広がった最大の原因は、イゼベルにある。
 - ①イゼベルは、多くの【主】の預言者たちを平気で殺した。

2. 北王国の危急に際して、神は預言者エリヤを遣わされた。
 - (1) エリヤという名は、「ヤハウェは私の神」という意味である。
 - ①真の神はヤハウェなのかバアルなのかという戦いが始められた。
 - ②これは、雨を降らせるのはヤハウェなのかバアルなのかという戦いである。

 - (2) カルメル山頂で、1人対450人の預言者たちの戦いが繰り広げられた。
 - ①この人数差に驚く必要はない。
 - ②聖書には、多数派が真理を保持したという例はない。
 - ③どの時代においても、信仰のあるイスラエル人は、少数派であった。
 - ④バアルの預言者たちは、朝から午後3時まで叫び、最後は、剣や槍で自らの肉体を切り裂いて血を流すまで騒ぎ立てたが、天からなんの応答もなかった。
 - ⑤エリヤが祈ると、神はお答えになった。
 - ⑥天から火が降り、全焼のささげ物、たきぎ、石、ちりを焼き尽くした。
 - ⑦これによって、【主】の勝利が確定した。
 - ⑧ようやく民は、【主】だけが真の神であることを認識した。

3. しかしイゼベルは、敗北を認めなかった。
 - (1) 彼女は、24時間以内にエリヤを殺すと宣言した。
 - ①彼女には、それほどの権力が備わっていた。

 - (2) エリヤは、イゼベルについての預言を語った。
 - ①1列21:23~24

1Ki 21:23 また、イゼベルについても【主】はこう言われる。『犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らう。』

1Ki 21:24 アハブに属する者で、町で死ぬ者は犬がこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。』

- ②この預言は、2列9:30~10:28で成就した。
- ③神に敵対したイゼベルの最期は、実に悲惨なものであった。

IV. アッシリア捕囚

1. 【主】はイスラエルに警告を発するために、しもべたち（預言者）を何度も送られた。
 - (1) 預言者たちは、モーセの律法を説いて、悪の道からの悔い改めを民に迫った。
 - ①しかし民は、なおも悪にとどまり続けた。
 - ②滅びは突如襲ってきたのではない。
 - ③彼らには何度も悔い改めの機会が与えられた。
 - ④彼らが預言者たちの警告を無視し続けたため、滅びが彼らを襲った。
 - ⑤彼らは、【主】が禁止されたカナン人の風習を採用して墮落して行った。
 - ⑥そこで【主】は、激しく怒り、彼らを御前から取り除かれた。
 - ⑦つまり、約束の地から追放されたということである。
 - ⑧それがアッシリア捕囚である。
 - (2) この悲惨な出来事は、神がご自分の民を見捨てたということではない。
 - ①これは、民に対する矯正的裁きである。
 - ②また、悪魔の策略への対抗策でもある。
 - (3) かくしてユダだけが残されることになった。
 - ①やがてユダも、イスラエルと同じ運命をたどることになる。

パートⅡ. 旧約時代

15章 南王国の崩壊

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

(1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

(2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17章)

4章 カインとアベル

5章 大洪水

6章 バベルの塔

7章 アブラハム契約

8章 出エジプト

9章 律法と幕屋

10章 カナン定住と士師記の時代

11章 士師記の時代から王制へ

12章 ダビデ

13章 ソロモン

14章 北王国の崩壊

15章 南王国の崩壊

4. アウトライン

(1) サタンの手先アタルヤ

(2) 名君ヒゼキヤ

(3) 悪王マナセ

(4) バビロンの王ネブカデネザル

南王国の崩壊について学ぶ。

I. サタンの手先アタルヤ

1. ユダには19人の王と1人の女王が出現した。

(1) 19人の王はダビデの家系から出たが、女王アタルヤだけがそうではなかった。

①19人の王の中で8人が名君（善王）である。

②サタンはメシアの出現を妨害するために、南王国の破壊を画策した。

③神は、名君を立てることによって、サタンの策略を阻止された。

(2) 名君たちがいたので、南王国は北王国よりも長く継続することになる。

①しかし、南王国の民には偶像礼拝に傾斜していく傾向があった。

②最終的には、バビロンによって滅ぼされることになる。

③バビロンは、イスラエルの民を裁くために立てられた神の器である。

2. アタルヤは、聖書に登場する女性の中で、最も邪悪である。（2列 11、2歴 22～23）。

(1) 父は北王国の王アハブ、母はフェニキア（シドン）の王女イゼベルである。

①南王国の王ヨラム（ヨシャパテの長男）の妻となり、数人の子を儲けた。

(2) アタルヤの息子たちは、ペリシテ人とアラビア人の攻撃を受けて殺される。

①末子アハズヤ（別名エホアハズ）だけが助かった（2歴 21：17）。

②アハズヤは王となるが、エフーによって暗殺された（2列 9：27～29）。

③エフーは残虐な人物であるが、墮落した王たちを裁くための「神の道具」としての役割を忠実に果たした。

(3) アタルヤは、それを自分が南王国の女王になるための機会と捉えた。

①彼女は、王の一族（自分の孫たち）をすべて抹殺することにした。

②この行為は、神の計画に対する挑戦であった。

③神は、ダビデの子孫が南王国の王位を継承すると約束しておられた。

④もしダビデの血統が途絶えたなら、ダビデの子孫からメシアが誕生するという神の計画は挫折する。

⑤つまり、アタルヤの背後でサタンが暗躍していたということである。

3. 神は、サタンの策略を阻止された。

(1) 孫たちの中から、末子ヨアシュ（わずか1歳）が救い出された。

①幼子は、アハズヤの姉妹のエホシェバによって救い出され、神殿に匿われた。

②まさに、「首の皮ひとつでつながった」とはこのことである。

③この幼子によって、ダビデの家系は守られた。

(2) 7年後、大祭司エホヤダが、幼子ヨアシュを王として擁立するために動いた。

①エホヤダは、忠実な臣下たちを神殿に呼び寄せ、王位奪還の計画を開示した。

②彼らは、女王アタルヤを王宮まで連行して処刑した。

③かくして、ダビデの血統を抹殺しようとするサタンの計画は、阻止された。

II. 名君ヒゼキヤ

1. 南王国が北王国よりも長く続いた理由

(1) 善王の存在と彼らもたらした何度かのリバイバル (信仰復興)

①その中で最大のものは、ヒゼキヤ王の下で起こったリバイバルである。

(2) ヒゼキヤは、北王国が滅びたときの南王国の王である。

①2列 18 : 5

2Ki 18:5 彼はイスラエルの神、【主】に信頼していた。彼の後にも前にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかった。

(3) 彼は、晩年になって棄教するのではなく、最後まで律法を守り続けた。

①それゆえ【主】は、彼を祝福された。

②彼の信仰は、以下のような行動となって表れた。

* 神殿の修理と再建 (2 歴 29 : 3~36)

* 過越の祭りや他のイスラエルの祭りの実行 (2 歴 30 : 1~27)

* 種々の宗教改革 (2 歴 31 : 2~21)

(4) 【主】は、ヒゼキヤの信仰を祝福し、彼に勝利をお与えになった。

①アッシリアのセナケリブがエルサレムに攻め上り、脅迫文を送って来たとき、ヒゼキヤは神殿に上り、それを【主】の前に広げて祈った。

②その夜、ユダの山地に宿営していたアッシリア軍の兵士たち 18 万 5,000 人が、【主】の使いによって打たれた。

③その後、セナケリブはニネベに帰還し、しばらくそこに住んだが、ニクロスの宮で礼拝していたとき、ふたりの息子がやって来て、彼を暗殺した。

④アッシリアの神ニクロスは、セナケリブを救うことができなかった。

⑤かくして、南王国を滅ぼそうとするサタンの策略は、再び無に帰した。

III. 悪王マナセ

1. 何度か起こったリバイバルによって、南王国の民の霊性は高められた。

(1) それでも、偶像礼拝への傾斜が止むことはなかった。

①神は、その都度預言者たちを遣わされた。

②しかし、南王国が偶像礼拝の罪から離れることはなかった。

2. 南王国で最悪の王は、マナセである。

(1) マナセは、12 歳で (前 697 年) 父ヒゼキヤとの共同統治を開始した。

①合計 55 年間王位にあった。

②2列 21：2

2Ki 21:2 彼は、【主】がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の忌み嫌うべき慣わしをまねて、【主】の目に悪であることを行った。

(2) 彼は、善王であった父ヒゼキヤの道ではなく、祖父アハズの悪の道に歩んだ。

①彼の悪行をリストアップすると、以下のようになる。

*ヒゼキヤが破壊した高き所（偶像礼拝の場）を再建した。

*バアルの祭壇を立てた。

*アシェラ像（淫乱な像であろう）を作った。

*アッシリアの天体礼拝を導入した。

*【主】の宮に天体礼拝のための祭壇を築いた。

*自分の子どものひとりをいけにえとして献げた。

*ト占、まじない、霊媒や口寄せなどを行った。

②彼は、モーセの律法も、【主】が先祖たちに与えた約束も無視し、軽蔑した。

③マナセが民を迷わせたので、民は誤った道を歩むようになり、最後は、かつてのカナン人たちよりも墮落した状態に陥った。

(3) 彼の治世は、南北王朝のどの王よりも長く続いたが、その記述は短い。

①霊的視点から、特記すべき事項がほとんどなかったということである。

(4) マナセ、アモンと悪王が続いたが、次に登場したのが、名君ヨシヤである。

①彼はわずか8歳で王となり、31年間王座に就いた。

②彼の治世下で、ユダは平和、繁栄、改革を経験した。

③しかし、ヨシヤによるリバイバルも、南王国を救う力にはならなかった。

IV. バビロンの王ネブカデネザル

1. 北王国を滅ぼしたのは、アッシリアであった。

(1) 背教の民を裁くという役割を終えたアッシリアは、表舞台から退場する。

2. 次に、裁きの器として立てられたのは、バビロンである。

(1) 前597年、バビロン軍はエルサレムに侵攻し、神殿を略奪した。

①ユダヤ人の政治的、文化的指導者たちは、バビロンに連行された。

(2) その中には、預言者エゼキエルもいた。

①彼は、バビロン滞在中に非常に重要な幻を見せられた。

②神殿からシャカイナグローリーが去るという幻であった（エゼ8～11）。

- ③これは、神の守りが南王国から取り去られるということを意味していた。
- ④この預言の成就が、前 586 年のエルサレムの町と神殿の崩壊である。
- ⑤南王国は、約 350 年の歴史を終えた。

3. 聖なる神は、北王国と南王国の罪を厳しく裁かれた。

- (1) その結果が、アッシリア捕囚とバビロン捕囚である。

4. しかし神は、契約の民が全滅することをお許しにならなかった。

- (1) 少数の信仰者の群れ（イスラエルの残れる者）が残された。

- (2) 神の裁きは、神の民の霊性を矯正するためのものであった。

- ①神は、イスラエルの残れる者の中からメシアが出るように歴史を導かれた。
- ②神の国と悪魔の国の戦いは、まだまだ続く。
- ③次回は、バビロン捕囚の時代を取り上げる。

パートⅡ. 旧約時代

16章 バビロン捕囚

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17章)
 - 4章 カインとアベル
 - 5章 大洪水
 - 6章 バベルの塔
 - 7章 アブラハム契約
 - 8章 出エジプト
 - 9章 律法と幕屋
 - 10章 カナン定住と士師記の時代
 - 11章 士師記の時代から王制へ
 - 12章 ダビデ
 - 13章 ソロモン
 - 14章 北王国の崩壊
 - 15章 南王国の崩壊
 - 16章 バビロン捕囚
 - (1) バビロン捕囚から神殿建設までの期間を取り上げる。
 - (2) この期間も、悪魔は神の民を破壊し、メシア到来を阻止しようとする。
 - (3) しかし神は、時宜に適った対抗策を次々に打ち出される。
 - (4) この期間、光の国と闇の国の葛藤は、ますます激しくなっていく。

4. アウトライン
 - (1) ネブカドネツァルの傲慢
 - (2) バビロンの滅亡
 - (3) 捕囚からの帰還
 - (4) 神殿建設

バビロン捕囚について学ぶ。

I. ネブカドネツアルの傲慢

1. 金の像の礼拝

- (1) ネブカドネツアルは、征服された民に金の像を礼拝するように要求する。
 - ①悪魔は、ユダヤ人を再び偶像礼拝に巻き込もうとしていたのである。
 - ②ユダヤ人が偶像礼拝で滅亡すれば、メシアが誕生する可能性はなくなる。
 - ③ネブカドネツアルは、悪魔の手先になったわけである。

- (2) 金の像の奉獻式に、政府の高官や諸州の高官が召集された。
 - ①そこに、ダニエルの3人の友人も列席していた。
 - *シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ
 - ②金の像のそばに火の燃える炉が設置された。
 - ③金の像を拝まない者は、その炉の中に投げ込まれると告知された。

2. 3人のユダヤ人青年の信仰

- (1) ユダヤ人にとっては生死を分ける重大な問題である。
 - ①3人のユダヤ人青年は、像を拝むことを拒否した。
 - ②王は、金の像を拝むのを拒むなら、炉の中に投げ込むと脅しをかけた。
 - ③「どの神が、私の手からおまえたちを救い出せるだろうか」と豪語した。
 - ④王には、エルサレムの神殿を略奪したことからくる自信があった。
 - ⑤この発言の背後に、サタンの傲慢を見ることができる。
 - ⑥かつてアッシリアのセンナケリブも、同じように豪語したことがあった。
 - *2列 18 : 32~35
 - *傲慢な支配者は、やがて辱めに遭う。

- (2) ダニエルの3人の友人たちは、信仰の道を選んだ。
 - ①「私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます」
 - ②死ぬことが御心なら、自分たちはそれに服するつもりである。
 - ③王は炉を7倍熱くせよと命じ、3人を衣服を着たまま炉の中に投げ込んだ。

3. 神の介入

- (1) 炉の外にいた人たちは焼き殺され、炉の中に落ちた人たちは生き続けた。
 - ①そればかりか、第4の者が炉の中に姿を現した。
 - ②王は、「第4の者の姿は神々の子のようだ」と叫んだ。
 - *これは、天使のようだという意味である。

- (2) 深く感銘を受けた王は、ユダヤ人の神を敬い、3人に報賞を与えた。

①かくして、サタンの策略は水泡に帰した。

II. バビロンの滅亡

1. バビロンの役割

(1) 神がバビロンに与えた役割は、イスラエルの民の罪を裁くことであった。

①その役割を終えたバビロンは、メド・ペルシアに取って代わられる。

2. バビロン滅亡の経緯

(1) 大宴会

①ネブカドネツアルの孫ベルシャツアルは、大宴会を催した。

②祖父ネブカドネツアルは、エルサレムの神殿から金と銀の器を奪ってきた。

③ベルシャツアルは、それらの聖なる器を宴会に用いた。

*ここにも、傲慢の罪が見られる。

(2) 突然、壁から人間の手の指が現れ、壁に何かを書き始めた。

①それを見た王は、深い恐怖に襲われた。

②王母は、その意味の解き明かしができる人物としてダニエルを推薦した。

③当時ダニエルは80歳前後で、政府の要職からは退いていたようである。

④彼は、偶像礼拝に染まったベルシャツアルを糾弾し、神の裁きを宣告した。

(3) ダニ 5 : 25~28

Dan 5:25 その書かれた文字はこうです。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』

Dan 5:26 そのことばの意味はこうです。『メネ』とは、神があなたの治世を数えて終わらせたということです。

Dan 5:27 『テケル』とは、あなたが秤で量られて、目方の足りないことが分かったということです。

Dan 5:28 『パルシン』とは、あなたの国が分割され、メディアとペルシアに与えられるということです。」

(4) その夜、バビロンはペルシア軍による夜襲を受けて崩壊した。

①ベルシャツアルは殺された。

②かくして、バビロンは神の前から排除された。

*神の計画は完全で、狂いがない。

*神に信頼を置く人は、幸いである。

III. 捕囚からの帰還

1. 神の裁きの期間が終わった。

(1) 捕囚は、偶像礼拝に陥ったイスラエルの民の上に下った神の裁きであった。

①70年が満ちたとき、神は再び契約の民に回復の機会を提供された。

(2) エレミヤは、バビロン捕囚は70年で終わると預言していた(エレ29:10)。

①これは、【主】がペルシアのキュロス王の霊を奮い立たせたことにより成就。

②神は、支配者の心を奮い立たせたり、変えたりすることがおできなる。

③イザ44:28

Isa 44:28 キュロスについては『彼はわたしの牧者。／わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。／エルサレムについては『再建される。／神殿はその基が据えられる』と言う。』

2. キュロス王は、イスラエルの民の祖国帰還と神殿建設を許可した。

(1) 彼は、政治的決断を下した。

①帝国の周辺に傀儡諸国を配置し、防衛力を高めるという目的(前538年)。

(2) 祖国に帰還したユダヤ人の数は、合計5万人弱であった。

①恐らく、捕囚民全体の1割か2割程度であろう。

②過半数のユダヤ人が、生活の安定を求めて捕囚の地に留まったのである。

③帰還した人々は、レムナント(イスラエルの残れる者、真の信仰者)である。

IV. 神殿建設

1. エルサレムに着いたユダヤ人たちは、早速、神殿建設に着手した。

(1) 神殿建設の重要性

①神殿は、信仰を安定させるためにどうしても必要なものであった。

②神殿再建は、神の御心に叶ったことであった。

2. ここで悪魔は、再建工事を妨害するために動いた。

(1) サタンが用いた器は、「ユダとベニヤミンの敵たち」(サマリア人)である。

①サマリア人は、北王国崩壊以降にその地に住み着いた混血民の子孫たち。

*2列17:23~24

(2) 彼らは、2つの方法で工事を妨害しようとした。

①工事に協力するという申し出をし、指導者たちをかく乱する。

②それがうまく行かない場合は、脅迫する。

*サタンの策略は、常に巧妙なものである。

*何が正論なのか、真実を見抜く目が必要とされる。

3. イスラエルの政治的リーダーと宗教的リーダーの活躍

(1) ゼルバベルとヨシュア

- ①彼らは、毅然とした態度で、ただちにその申し出を拒否した。
- ②敵に付け入る隙を与えないためである。

(2) 申し出を断る理由が2つある。

- ①自分たちは、イスラエルの神のために宮を建てようとしている。
 - *サマリア人が礼拝している神とイスラエルの神は、同じ神ではない。
- ②宮の建設計画は、キュロス王が自分たちに命じたものである。
 - *それゆえ、神殿は自分たちだけで完成させる。

4. サマリア人の反撃

(1) 申し出を拒否されたサマリア人は、反撃に出た。

- ①脅迫とペルシア帝国内での宮廷工作
- ②ユダヤ人たちに絶望感を与えようとした。
- ③そのため、神殿建設の工事は、一時中断した。
- ④ユダヤ人の敵が一時的に勝利したかのように見える状況が訪れた。

5. 2人の預言者

(1) 神は、ハガイとゼカリヤという2人の預言者をお立てになった。

- ①彼らの役割は、民を教え、励ますことであった。

(2) 工事停滞の原因は、2つあった。

- ①外的要因 (サマリア人の妨害)
- ②内的要因 (民の怠惰)

(3) ハガイは、民の怠惰が問題であると指摘した。

- ①民は、神殿よりも自分の生活を建て直すことに熱心であった。

(4) ゼカリヤは、神殿建設は【主】から出たことであると語った。

- ①異邦人の王は、そのために用いられているに過ぎない。
- ②工事の完成は、【主】の霊によると預言した。
- ③ゼカ 4:6

Zec 4:6 彼は私にこう答えた。／「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。／『権力

によらず、能力によらず、『わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。

*彼とは天使、私とはゼカリヤ。

6. 神殿の工事の再開

- (1) 神殿がなければ、シナイ契約の内容を実行することができない。
 - ①そのため、2人の預言者は、神殿建設を最優先課題としたのである。

- (2) 政治的リーダーはゼルバベル、宗教的リーダーはヨシュア。
 - ①彼らは、2人の預言者が語る神のことばに励まされて、工事を再開した。

- (3) 中断していた工事は14年後に再開され、神殿は前515年に完成した。
 - ①神が2人の預言者を送り、ユダヤ人たちを励ましたからである。
 - ②またもや、サタンの策略は神によって粉碎されたのである。

パートⅡ. 旧約時代

17章 ペルシア時代

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。

- (1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。

- (2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3章)

3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17章)

- 4章 カインとアベル

- 5章 大洪水

- 6章 バベルの塔

- 7章 アブラハム契約

- 8章 出エジプト

- 9章 律法と幕屋

- 10章 カナン定住と士師記の時代

- 11章 士師記の時代から王制へ

- 12章 ダビデ

- 13章 ソロモン

- 14章 北王国の崩壊

- 15章 南王国の崩壊

- 16章 バビロン捕囚

- 17章 ペルシア時代

- (1) ペルシア帝国内で起こった出来事

- (2) 帰還した地で起こった出来事

- *神の国と悪魔の国の葛藤は、継続している。

4. アウトライン

- (1) ペルシア帝国内の反ユダヤ的出来事

- ①エステルとモルデカイ

- ②反ユダヤ主義者ハマーン

- ③神の介入

- (2) 帰還した地での反ユダヤ的出来事

- ①エズラ

- ②3人の預言者

ペルシア時代における神の国と悪魔の国の葛藤について学ぶ。

I. ペルシア帝国内の反ユダヤ的出来事

1. エステルとモルデカイ

(1) バビロンからペルシアへの移行

- ①前 586 年、多くのユダヤ人が強制的にバビロンに移住させられた。
- ②後になって、バビロンはペルシアに滅ぼされる。
- ③ペルシアのキュロス王が、ユダヤ人の帰還許可の勅令を出した(前 539 年)。
- ④しかし、多くのユダヤ人がそのまま捕囚の地 (ペルシア帝国) にとどまった。

(2) クセルクセス

- ①ダリヨスの後を継いだのは、クセルクセス (別名アハシュエロス) である。
- ②クセルクセスの時代には、多くのユダヤ人がペルシア帝国に住んでいた。
- ③クセルクセスは、妃を選ぶために、未婚の娘たちをスサの後宮に集めた。
- ④その中に、エステル (星という意味) というユダヤ人の娘がいた。

(3) エステル

- ①両親を亡くした彼女は、モルデカイの養女となっていた。
- ②モルデカイは、エルサレムから捕え移されてきた捕囚民の子孫である。
 - * 2 列 24 : 10~16 (バビロン捕囚の様子)
 - * モルデカイは、信仰熱心な人であった。
- ③王宮に着いたエステルは、ただちに監督官であるヘガイの好意を得た。
 - * 神の御名は出てこないが、神の摂理の御手は伸ばされていた。
- ④やがてエステルは、王の好意を受けて王妃となる。
- ⑤神の摂理の御手の前例
 - * エジプトの獄中にいたヨセフは、監獄の長の好意を得た (創 39 : 21)。
 - * バビロンにいたダニエルは、宦官の長の好意を得た (ダニ 1 : 9)。

(4) モルデカイ

- ①当時モルデカイは、何らかの官職に就いていたようである。
- ②彼は偶然にも、2 人の宦官による王の暗殺計画を耳にする。
- ③彼はそれを、エステルを通して王に伝えた。
- ④この事件は、王の年代記の書に書き残されたが、王はそれを忘れてしまった。
- ⑤後にそれを思い出した王は、モルデカイに報賞を与えることになる。
 - * このことの背後にも、神の摂理の御手がある。
 - * 神の御手は、神のタイミングで伸ばされる。

2. 反ユダヤ主義者ハマーン

(1) アガゲ人ハメダタの子ハマーン

- ①ハマーンは、王によって高い地位に登用された。
- ②彼はアマレク人の子孫であり、筋金入りの反ユダヤ主義者であった。

(2) ハマーンの横暴

- ①王の家来たちはみな、ハマーンの前にひれ伏した。
- ②モルデカイだけは、それを拒否した。
 - *彼は、離散の地にあっても異文化に同化しなかった。
 - *彼は、自らの文化や宗教を守り続けた。
- ③激怒したハマーンは、ユダヤ民族全体を根絶やしにしようと決心した。
- ④悪魔は、ハマーンを道具として用いて、ユダヤ人を抹殺しようとしたのである。

(3) ハマーンのユダヤ人抹殺計画

- ①ハマーンは、古代オリエントの習慣に従ってくじを引いた。
- ②ユダヤ人抹殺計画を実行する時期を決めるためである。
- ③最初の月（1月）にくじを引いたが、くじは最後の月（12月）に当たった。
- ④ユダヤ人たちにとっては、約1年間の猶予が与えられたということである。
- ⑤人はくじを引くが、それを決めるのは、神である。

3. 神の介入

(1) モルデカイは、エステルに執りなしを要請した。

- ①民族の運命が、彼女の執りなしにかかっていると伝えた。
- ②王の前に出た執りなしは、命懸けである。

(2) エステルに伝えられたモルデカイのことば (エス4:14)

Est 4:14 もし、あなたがこのようなときに沈黙を守るなら、別のところから助けと救いがユダヤ人のために起こるだろう。しかし、あなたも、あなたの父の家も滅びるだろう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。」

- ①エステルも、ユダヤ人虐殺法の対象であり、例外ではない。
- ②今行動しないなら、神は別の人物を立てるであろう。
- ③エステルに与えられた立場は、この時のために与えられたものである。

(3) エステルの信仰のことば (エス4:16)

Est 4:16 「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食

します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます」

- ①これは、最善をなさる神への信頼のことばである。
- ②彼女の執りなしが功を奏し、事態は急展開を見せる。
- ③王の命で、ハマンは柱にかけられた。
 - *この柱は、モルデカイを殺すために用意しておいたものである。
 - *ハマンは、自らが蒔いた種の刈り取りをした。
- ④ユダヤ人たちは祝宴を開いた。
- ⑤この祝宴は、プル（くじ）にちなんでプリム（プルの複数形）と呼ばれた。
- ⑥彼らは、民族の記憶として、神の恵みの御業を覚えておこうとしたのである。
- ⑦かくして、悪魔のユダヤ人抹殺計画は阻止された。

II. 帰還した地での反ユダヤ的出来事

1. エズラ

(1) 帰還民を導いたのは、律法学者エズラである。

- ①帰還の目的は、先祖たちの信仰の道（律法に従う道）を歩むためである。
- ②しかし、彼らの心には古い罪の性質が残っていた。
- ③それを示すある事件が持ち上がった。

(2) 異教徒との雑婚

- ①長老たちが、民の「雑婚」の罪について、エズラに報告した。
- ②エズラは、この時代の宗教改革の指導者であった。
- ③神殿での清めの儀式は、行いが間違っているならなんの意味もない。
 - *ホセ 6 : 6、ミカ 6 : 6~8 参照
- ④モーセの律法は、雑婚を禁じている。
 - *出 34 : 11~16、申 7 : 1~4 参照
- ⑤この命令は宗教的なものであって、人種差別ではない。
 - *周辺の民族はすべてイスラエル人と同じセム系である。
 - *異民族との結婚が偶像礼拝をもたらすことは、歴史が証明している
 - *最大の失敗例は、ソロモンである（1列 11 : 3~5）。
- ⑥聖なる民（分離）として生きるようにとの命令は、無視された。
- ⑦その背後には、悪魔の巧妙な誘惑があった。
- ⑧異教徒の妻をめとった者は、次第に妻の宗教を受け入れるようになる。
- ⑨その結果、偶像礼拝をイスラエルの民の中に持ち込むことになる。
- ⑩民の内面が根本から変わらない限り、偶像礼拝の問題は存在し続ける。

(3) 雑婚の問題の解決策

- ①エズラは【主】の前に涙の祈りを献げ、民に勧告のことばを語った。
- ②民は、大雨の中で罪を告白し、悔い改めを行動(異邦人妻の離縁)で示した。
- ③雑婚を通して偶像礼拝を広めようとしたサタンの策略は、破壊された。

(4) エズラの功績

- ①神殿の再建
- ②イスラエルの民の霊性の再建
 - *民の霊性の再建のために必要とされたのは、悔い改めである。
 - *ここに、私たちへの希望がある。
 - *どんな人でも、悔い改めを通して神に立ち返ることができる。

2. 3人の預言者たち

(1) 預言者の分類

- ①捕囚期前預言書は、12ある。
- ②捕囚期預言書は、2つある。
 - *エゼキエル書とダニエル書がそれである。
- ③捕囚期後預言書は、3つある。
 - *ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書がそれである。

(2) ハガイ、ゼカリヤ、マラキ

- ①帰還民に、神は3人の預言者たちを送り、励ましのメッセージを語らせた。
- ②預言者たちは、民の信仰を鼓舞し、御国の希望を語った。
- ③彼らは、悪魔の攻撃に対抗するために神が遣わした神のしもべたちである。
- ④旧約聖書の最後の預言者は、マラキである。
- ⑤それ以降、約400年にわたって神の沈黙の時が来る。
- ⑥これを「中間時代」と言う。
- ⑦神は沈黙されたが、働きを停止されたわけではない。
- ⑧それどころか、メシア到来の舞台を準備しておられた。
- ⑨今回は、「中間時代」について学ぶことにする。

パートⅢ. 中間時代

18章 中間時代 (1)

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。
2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3章)
3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17章)
 - 14章 北王国の崩壊
 - 15章 南王国の崩壊
 - 16章 バビロン捕囚
 - 17章 ペルシア時代
4. パートⅢ. 中間時代 (18～19章)
 - 18章 中間時代 (1)
 - (1) 中間時代は、英語で「intertestamental period」と言う。
 - (2) マラキ書が完成してからキリストが登場するまでの期間を指す。
 - ①旧約聖書と新約聖書の間横たわる「400年の沈黙の期間」
 - ②新しい啓示がなかった理由は、それを必要としない時代だったから。
 - ③神は依然として、契約の民イスラエルを忘れてはおられなかった。
 - (3) 中間時代は、メシア登場の舞台を整えるための時代であった。
 - (4) この期間に、イスラエルの政治的、宗教的、社会的状況は激変した。
 - (5) その背後に、神の国と悪魔の国の葛藤が見え隠れする。
5. アウトライン
 - (1) 政治的状況の変化
 - (2) 宗教的状況の変化
 - (3) 社会的状況の変化

中間時代における神の国と悪魔の国の葛藤について学ぶ。

I. 政治的状況の変化

1. 神は、御心を成就するために、異邦人の帝国を「神のしもべ」としてお用いになる。
 - (1) 神がバビロンに与えた役割は、ユダヤ人たちの偶像礼拝の罪を裁くこと。
 - ①バビロン捕囚が起こった理由は、そこにある。
 - ②これ以降、ユダヤ人たちが民族的に偶像礼拝の罪に陥ることはなくなった。
 - ③バビロン捕囚の教訓が生きたのである。

(2) バビロンが役割を終えると、次にペルシア帝国が興り、バビロンを滅ぼした。

- ①ペルシアの役割は、ユダヤ人たちを約束の地に帰還させることであった。
- ②さらに、帰還した地で、国を再建するように促すことであった。
- ③その役割を終えると、ペルシアもまた、歴史の表舞台から去る。
- ④マケドニアのアレクサンドロスの軍勢が、ペルシアを滅ぼしたのである。

2. 帝国の興亡は、ダニ 2 : 31~35 の預言通りに進んだ。

(1) その箇所には、バビロンのネブカドネツアル王が見た夢が記録されている。

Dan 2:31 王よ。あなたが見ておられると、なんと、一つの巨大な像が現れました。この像は巨大で、異常な輝きを放って、あなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。

Dan 2:32 その像は、頭は純金、胸と両腕は銀、腹とももは青銅、

Dan 2:33 すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。

Dan 2:34 あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。

Dan 2:35 そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の籾殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。

- ①ネブカドネツアルは、夢で1つの大きな像の幻を見た。
- ②これは、異邦人の4大帝国の興亡に関する幻であった。

3. その幻をダニエルが、以下のように解き明かした。

(1) 像の頭は純金 (バビロン帝国)

- ①純金は、バビロンが栄光に富んだ帝国であることを示している。
- ②役割を終えると、メド・ペルシア連合帝国によって滅ぼされた (前 539 年)。

(2) 像の胸と両腕は銀 (メド・ペルシア連合帝国)

- ①銀は、ペルシアの栄光がバビロンほどではないことを示している。
- ②ペルシアは、ユダヤ人が自分の宗教を維持することを許した。
- ③キュロスは、ユダヤ人の祖国帰還と、エルサレム神殿の再建を許可した。
- ④この時期は、ユダヤ人にとっては比較的平和な時代であった。
- ⑤旧約時代の最後の 100 年から中間時代の最初の 100 年にかけての 200 年間

(3) 像の腹とももは青銅 (アレクサンドロス大王のマケドニア帝国)

- ①青銅は、マケドニアの栄光が、バビロンやペルシア以下であることを示す。

- ②アレクサンドロスは、ペルシアのダレイオスを撃破した (前 331 年)。
- ③この勝利によって、ギリシア系のマケドニア帝国が世界の覇権国となった。
 - *アレクサンドロスは、アリストテレスからギリシア哲学を学んだ。
 - *アレクサンドロスは、ギリシア文明の庇護者となった。
 - *マケドニアの将軍たちは、遠征地に留まり、現地の女性たちと結婚した。
 - *その結果、東方世界がギリシア化 (ヘレナイズ) して行った。
- ④ギリシア文明の本質は、世俗的で人間中心主義である。
 - *当然、偶像礼拝に対しても寛容な態度を取った。
- ⑤サタンは、ギリシア文明を通して、ユダヤ人の信仰を破壊しようとした。
- ⑥アレクサンドロスの死後、帝国は 3 分割された。
 - *マケドニアのアンティゴノス朝
 - *エジプトのプトレマイオス朝
 - *シリアのセレウコス朝
- ⑦セレウコス朝の王アンティオコス・エピファネスが、特に問題である。
 - *彼は、自らの支配地域にギリシア風信仰を押しつけようとした。
 - *彼は、神殿に豚を捧げ、そこに異教の祭壇を築いた (前 167 年頃)。
 - *これは、サタンによるユダヤ人の信仰の破壊活動である。
 - *ユダヤ人は激怒し、抵抗運動を起こした。
 - *これが、ユダ・マカバイが指導得者となって戦ったマカバイ戦争である。
- ⑧マカバイ戦争に勝利したユダヤ人は、自治権を獲得した。
- ⑨ユダヤ人の王朝であるハスモン朝が誕生した (前 140~前 37 年)。

(4) 像のすねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土 (第 4 の帝国 - 帝国主義)

- ①鉄は、第 4 の帝国が武力的に優れていることを示している。
- ②ハスモン朝を破るのは、ローマ帝国である。
 - *アリストブロス 2 世とヒルカノス 2 世による内紛が起こっていた。
 - *両者は、オリエントに侵攻したポンペイウスを味方につけようとした。
 - *ポンペイウスはヒルカノスに付き、エルサレムを陥落させた (前 63 年)。
 - *かくしてユダヤは、ローマの属国となった。
- ③イドマヤ人のヘロデは、ローマ帝国によって任命されたユダヤの王である。
 - *彼は、ローマ帝国の傀儡王である。
 - *ヘロデは、ユダヤ人を懐柔するために第二神殿の拡張工事を行った。
 - *メシアであるイエスが訪問されたのは、この神殿である。
- ④ユダヤでは、ギリシア・ローマ文明とヘブル文明が混在するようになった。
- ⑤ヘロデの統治下にあつて、ユダヤ人たちは、圧政と重税に苦しめられた。
- ⑥その結果、ユダヤ人の中にはメシア待望の機運が高まった。

4. まとめ

- (1) 次回取り上げるが、中間時代には、大きな宗教的変化がいくつも起こった。
- (2) サドカイ派とパリサイ派は、この時代に誕生したユダヤ教の分派（派閥）。
- (3) サタンは、ユダヤ人抹殺のために、政治的にも宗教的にも混乱をもたらした。
- (4) しかし神は、メシアを遣わすというご自身の計画を、着々と進めておられた。

パートⅢ. 中間時代

19章 中間時代 (2)

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。
2. パートⅠ. 葛藤の舞台設定 (1～3章)
3. パートⅡ. 旧約時代 (4～17章)
 - 14章 北王国の崩壊
 - 15章 南王国の崩壊
 - 16章 バビロン捕囚
 - 17章 ペルシア時代
4. パートⅢ. 中間時代 (18～19章)
 - 18章 中間時代 (1)
 - (1) 中間時代は、英語で「intertestamental period」と言う。
 - (2) マラキ書が完成してからキリストが登場するまでの期間を指す。
 - ①旧約聖書と新約聖書の間を横たわる「400年の沈黙の期間」
 - ②新しい啓示がなかった理由は、それを必要としない時代だったから。
 - ③神は依然として、契約の民イスラエルを忘れてはおられなかった。
 - (3) 中間時代は、メシア登場の舞台を整えるための時代であった。
 - (4) この期間に、イスラエルの政治的、宗教的、社会的状況は激変した。
 - (5) 前回の結論
 - ①ギリシア・ローマ文明とヘブル文明が混在するようになった。
 - ②ヘロデの統治下にあつて、ユダヤ人たちは、圧政と重税に苦しめられた。
 - ③その結果、ユダヤ人の中にはメシア待望の機運が高まった。
 - 19章 中間時代 (2)
 - (1) 政治的状況の変化
 - (2) 宗教的状況の変化
 - (3) 社会的状況の変化
5. アウトライン
 - (1) 政治的状況の変化
 - (2) 宗教的状況の変化
 - (3) 社会的状況の変化

中間時代における神の国と悪魔の国の葛藤について学ぶ。

Ⅱ. 宗教的状況の変化

はじめに

- (1) 中間時代に、いくつかの新しいグループが登場した。

- ①福音書には、サドカイ派、パリサイ派、熱心党などのグループが登場する。
 - ②旧約聖書を調べても、それがどういうグループなのかは分からない。
 - ③ここでは、サドカイ派とパリサイ派を取り上げる。
- (2) もう1つ重要なのは、ギリシア語訳聖書の誕生である。

1. サドカイ派

- (1) ユダヤ教の一派で、祭司と貴族階級から成っていた。
- (2) 政治的には親ローマであった (既得権益が与えられていた)。
- (3) 一般民衆からの支持はなかった。
- (4) 神殿での礼拝は完全に彼らによって仕切られていた。
 - ①両替やいけにえの販売は、大祭司のファミリービジネスとなっていた。
- (5) 信仰的には問題があった。
 - ①モーセの五書しか神のことばとして認めていなかった。
 - ②天使や悪霊の存在を否定し、魂の永遠性や肉体の復活なども認めなかった。
 - ③パリサイ派の口伝律法に強く反発した。
 - ④イエスとの論争において、その神学的理解の問題点が浮き彫りになった。

2. パリサイ派

- (1) パリサイ派も、ユダヤ教の一派である。
 - ①ヘブル語で「パラシム」、ギリシア語で「ファリサイオス」という。
 - ②「分離した」という意味である。
- (2) 種々のグループの中で、信仰的・文化的に最も保守的な派である。
 - ①特に、ユダヤ教のヘレニズム化には強く抵抗した。
 - ②教理的には、イエスの信仰は、サドカイ派よりもパリサイ派に近かった。
- (3) パリサイ派の信仰内容
 - ①死者の復活を信じていた。
 - ②永遠の報賞と永遠の裁きを信じていた。
 - ③天使や悪霊の存在を信じていた。
 - ④律法、預言者、諸書の全体を神の啓示と信じていた。
 - ⑤律法の遵守を徹底させるために、律法の周りに垣根を立てた。
 - ⑥この口伝律法は、民衆に負いきれないほどの重荷を与えた。
- (4) この時代、民衆にとっては、ユダヤ教と言えばパリサイ的ユダヤ教であった。
- (5) パリサイ人の中には、イエスを支持する人とイエスに敵対する人がいた。
 - ①教会誕生直後は、教会に対して中立的な立場を取っていた。
 - ②使8章になって、パリサイ人のサウロが教会を迫害するようになる。

3. ギリシア語訳聖書

- (1) ヘブル語を解さないユダヤ人が増えたので、ギリシア語訳が必要になった。
- (2) その結果、七十人訳聖書 (LXX と略す) が誕生した。
 - ①ラテン語読みでは、セプトゥアギンタ。
 - ②前 3C 中頃から前 1C の間に、徐々に翻訳・改訂されたギリシア語訳の総称。
- (3) 旧約聖書のギリシア語訳が出来たのは、画期的なことであった。
- (4) 新約記者が旧約から引用する場合は、ほとんどが七十人訳からの引用である。

III. 社会的状況の変化

1. ユダヤ人たちのメシア待望

- (1) ユダヤ人たちは、自分たちが置かれている現状に絶望していた。
- (2) バビロンから帰還したが、ペルシアやギリシアによる支配が続いた。
- (3) セレウコス朝の圧政に対抗したマカバイ戦争
- (4) 一時的に自治権を獲得したが、すぐにローマによる支配が始まった。
- (5) 絶望したユダヤ人たちは、メシアの到来を期待するようになった。
- (6) マタ 3 : 1~3

Mat 3:1 そのころバプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べ伝えて、

Mat 3:2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言った。

Mat 3:3 この人は、預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。／『主の道を用意せよ。／主の通られる道をまっすぐにせよ』」／と言われた人である。

- ①ヨハネが荒野に現れたとき、群衆は大挙して彼のもとに出て行った。
- ②その理由は、メシア待望の高まりにある。

2. 異邦人たちの失望

- (1) ローマ人の中にも、多神教や既存の宗教に疑問を持つ者が、たくさんいた。
- (2) ギリシア語聖書の誕生により、ユダヤ人の神に関心を示す人たちが出た。
- (3) 彼らは、ローマ世界の各地に建てられたユダヤ教の会堂に集うようになった。
- (4) 彼らは、「神を恐れる異邦人」と呼ばれた。
- (5) 新約に登場する百人隊長は、そのほとんどが「神を恐れる異邦人」であった。

3. 神による準備

- (1) ローマによる平和
 - ①安全な旅行が可能になった。
 - ②弟子たちが伝道旅行に出て行くための環境が整えられた。
- (2) ローマによる道路建設
 - ①旅行の安全だけでなく、短時間での移動を可能にした。

(3) 共通語としてのギリシア語

- ①共通語での伝道が容易になった。
- ②話し言葉「コイナー・グreek」は、新約聖書のギリシア語である。

(4) 会堂の存在

- ①会堂という概念は、バビロン捕囚の期間に誕生したものである。
- ②ユダヤ教を維持するための方法として会堂は生き延びた。
- ③捕囚から帰還したユダヤ人たちは、各地にシナゴグを建てた。
- ④ディアスポラの地に留まったユダヤ人たちも、会堂での活動を続けた。
- ⑤会堂は、神殿での礼拝を補完するものとなった。
- ⑥紀元 1 世紀、イスラエルの地には 480 の会堂があったとされる。
- ⑦会堂は、その地におけるユダヤ人の生活の中心となった。
- ⑧会堂は、パウロの伝道旅行のためのインフラストラクチャーともなった。

結論

- 1. 悪魔は、ユダヤ人を滅ぼそうとして種々の混乱をもたらした。
- 2. 神は、悪魔の策略をはるかに超えて、メシア到来の準備をしておられた。

パートIV. 新約時代
20章 メシアの到来
—十字架への道を妨害する悪魔—

イントロダクション

1. 「神の国と悪魔の国の葛藤」というテーマに沿って聖書を読み解いている。
 - (1) この葛藤は、創世記3章以来続いているものである。
 - (2) この葛藤は、黙示録20～21章で終わる。

2. 文脈の確認
 - (1) パートI. 葛藤の舞台設定 (1～3章)
 - (2) パートII. 旧約時代 (4～17章)
 - (3) パートIII. 中間時代 (18～19章)
 - (4) パートIV. 新約時代 (20～23章)

3. 18章と19章 (中間時代) の結論
 - (1) 中間時代は、マラキ書が完成してからキリストが登場するまでの期間を指す。
 - (2) 中間時代は、メシア登場の舞台を整えるための時代であった。
 - ①イスラエルの政治的、宗教的、社会的状況は激変した。
 - ②ギリシア帝国は、ギリシア語を提供するという役割を果たした。
 - ③前63年、共和政ローマのポンペイウスがエルサレムを陥落させた。
 - ④この時から、ユダヤは実質的にローマの属国となった。
 - ⑤前37年、ローマはヘロデ大王をユダヤの王に任命した。
 - ⑥ヘロデは、ローマの傀儡王としてユダヤを統治した。
 - ⑦これで、メシア登場の舞台が整った。

4. アウトライン
 - (1) メシアの誕生
 - (2) メシアの抹殺
 - (3) メシアの誘惑

十字架への道を妨害する悪魔の策略について学ぶ。

I. メシアの誕生

1. 創3:15で約束されていた「女の子孫」は、ついに誕生した。
 - (1) ガラ4:4

Gal 4:4 しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者

として遣わされました。

①「時が満ちて」とは、中間時代に諸条件が整ったことを示している。

2. メシアを産んだのは、ガリラヤのナザレに住む乙女マリア（ミリアム）であった。

(1) ルカ 1 : 31

Luk 1:31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。

①これは、イザ 7 : 14 の成就である。

②イエスは、ヘブル語で「イエシュア」（主は救い）という。

(2) ルカ 1 : 32~33

Luk 1:32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

Luk 1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

①「大いなる者となり」とは、偉大な者となるという意味である。

②「いと高き方」はヘブル語で「ハ・エルヨン」で、神の御名そのものである。

* 「ハ・エルヨン」の子とは、イエスが神性を持っているという意味。

③「父ダビデの王位をお与えになります」は、2サム 7 : 12~17 のダビデ契約の成就であり、イエスがダビデの家系から来られたことを示している。

④「彼はとこしえにヤコブの家を治め」は、イエスがユダヤ人のメシアであることを示している。

⑤「その支配に終わりはありません」という約束は、イエスの再臨と千年王国（メシア的王国）の出現によって成就する。

(3) 悪魔は「女の子孫」の誕生を妨害してきたが、その試みは失敗に終わった。

①約束のメシアはついに、人間の姿を取って地上に現れた。

②メシアの生涯のゴールは、十字架上で血を流すことによって、信じる者に罪の赦しを得させることであった。

(4) これ以降の悪魔の努力は、メシアの贖いの業を妨害することに向けられる。

①イエスが十字架上で死なないようにすることが、悪魔のゴールとなる。

II. メシアの抹殺

1. ヘロデによる幼子暗殺計画

(1) 悪魔は、ヘロデを用いてイエス（ダビデの王座に着く者）を殺そうとした。

①しかし、神は天使を遣わし、イエスの一家をエジプトに避難させた。

(2) マタ 2 : 16

Mat 2:16 ヘロデは、博士たちに欺かれたことが分かったと激しく怒った。そして人を遣わし、博士たちから詳しく聞いていた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯の二歳以下の男の子をみな殺させた。

①メシア抹殺計画は、神の介入（天使の御告げ）によって失敗に終わった。

2. ナザレの住民による殺害計画

(1) 公生涯に入ったイエスは、ナザレを訪問し、会堂で神の国の到来を宣言した。

①これは、イエスによるメシア宣言である。

(2) ナザレの人たちは、イエスを町の外に追い出し、崖から突き落とそうとした。

①イエスは、超自然的に彼らのただ中を通り抜けて、難を逃れた。

②悪魔は、ナザレの人たちを用いてイエスを殺そうとしたが、未遂に終わった。

3. ユダヤ人たちによる投石事件

(1) 悪魔は、ユダヤ人たちを利用することもあった。

①イエスの教えを聞いたユダヤ人たちは、イエスを石打にしようとした。

*冒流罪の嫌疑

②同様の出来事が、少なくとも2回起きている。

*ヨハ8:59と10:39

③いずれの場合も、イエスは神殿から無事に出て行った。

III. メシアの誘惑

はじめに

(1) 悪魔は、選民イスラエルを誘惑し、信仰的に墮落させた。

①これはサタンにとっては容易なことであった。

(2) 彼は、同じ戦略を用いて「イスラエルの中のイスラエル」であるイエスを信仰的に墮落させようとした。

1. 荒野での誘惑

(1) イエスは、ヨルダン川で洗礼を受けた直後に、荒野で悪魔の誘惑に遭った。

①荒野は神の声を聞き神に近づく場所である。

②40日間に及ぶ断食の後、聞こえてきたのは、試みる者の声であった。

③悪魔の計画は、十字架を迂回した、より手っ取り早い人類救済計画をイエスに提案することであった。

- (2) イエスは、悪魔の3つの誘惑に対抗するために、申命記から聖句を引用した。
- ①申命記は、神とイスラエルの民の間の契約を記した「契約の書」である。
 - ②イスラエルの民はその契約に違反した。
 - ③御子イエスは、「契約の書」を引用することによって誘惑に勝利した。

2. ペテロを用いた誘惑

- (1) 悪魔は、愛弟子ペテロを通して、十字架の計画を妨害した。
- (2) 受難の予告を聞いたペテロは、自らの判断と理解に基づいて行動を起こした。

①マタ 16 : 22

Mat 16:22 すると、ペテロはイエスをわきにお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」

- ②「いさめる」とは大変厳しいことばである。
- ③あることが起こらないように、下の者が上の者を説き伏せるという意味。

- (3) イエスは、ペテロの背後にサタンがいることを見抜かれた。

①マタ 16 : 23

Mat 16:23 しかし、イエスは振り向いてペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

- ②これは、ペテロがサタンだと言っているのではない。
- ③彼の判断、行動、発言が、サタンの立場に立っているという意味である。
- ④サタンの立場とは、イエスが過越の祭りの時に十字架につかないように妨害する、ということである。

3. 結論

- (1) 悪魔は、あらゆる手段を用いてイエスの活動を妨害しようとしたが、そのすべてが失敗に終わった。

- (2) 十字架にかかる前の夜、イエスはサタンとの戦いを振り返り、こう言われた。

①ヨハ 14 : 30

Joh 14:30 わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることができません。

- (3) イエスは、私たちを愛する愛のゆえに、自らすすんで十字架にかかられた。